

本の紹介

高岡 健次郎

ポーランド現代史

(世界現代史 二十七) 伊東孝之著
(山川出版社、一九八八年八月刊、二千三百円)

世界現代史シリーズ(全三十七巻、山川出版社)の一冊として、その出現が待たれていた『ポーランド現代史』が、この八月に刊行されました。著者の伊東孝之氏は北大スラブ研究センター教授。ポ文協の運営委員でもあります。十年あまり前に出た『東欧史(新版)』(山川出版)でもポーランドの現代史を分担執筆しているように、以前からこの分野の第一線で活躍している方で、最近では昨年、共編著『東欧現代史』(有斐閣)を刊行し、「史学雑誌」等で好評を得ました。

今回の新刊『ポーランド現代史』は、本文が十章に分けられています。

まず「ポーランド史の諸前提」と名付けられた第一章で、著者は、中世までさかのぼってポーランドの文化、社会、政治の特質をさぐり、十八世紀後半のいわゆるポーランド分割にも論及していますが、つづく諸章を読みすすむと、この亡国の悲運がその後の歴史に残した傷あとの深さに

誰もが気づくはずで、たとえば第一次大戦後、念願の独立を回復したポーランドには、代表的三都市ワルシャワ・ポズナン・クラコフを結ぶ鉄道線もなかったという著者の指摘は、その簡明な一例を示したものと見えるでしょう。

だが本書の重点は、「まえがき」で明記されているように、「狭義の現代史」としての戦後史におかれており、過半のページを占める第六章以下で、一九四八〜四九年を画期とする「共産党二元支配体制」の確立、五年の民主化運動を契機とするゴムウカ体制の成立、七〇年十二月事件によるギエレク政権の出現とその崩壊といった戦後史の流れが、その推移・転換を必然化した諸要因への鋭い洞察をまじえながら、くわしく展開されていきます。またこの際、五六年以降のポーランド史は国家に対する「社会の自立性回復の歴史である」という著者の明快な分析視角が、この間の労働者など諸社会層の動きを透

視しその本質を引き出す上で、有効な力を発揮しているように思われます。本書が最大の力点をおいている八〇年代初頭の「連帯」時代は、この視角からみれば、社会の革命的活性化の時代であり、その中で成立した政労協定(八〇年八月三十一日)以降十六カ月にわたる「グダンスク体制」は、その本質として「国家と社会の分業体制」と把握されるので

早くもグダンスク協定締結八周年記念日を迎えたポーランドから、「連

帯」再合法化の要求などを掲げたストライキ等の動きが報じられ、日本でも改めて「連帯」時代の記憶と関心がよびさまされていきます。歴史が現代と過去の対話だとすれば、人びとの関心は、今日のポーランドの国家と社会の緊張関係を生み出した歴史的背景へと遡及していかざるをえません。本書は、現在わが国でも信頼のおけるポーランド現代史として、このような真しな歴史的関心に応え、それを満たしてくれると思います。

北の十字架 ポーランド詩集

米川和夫訳(青土社、二千八百円)

先年、ポーランドの詩人ミオシユがノーベル文学賞を受賞したことは御存知の方も多いと思いますが、ポーランドでは古くから詩が文学の中でも大きな位置を占めてきました。

本詩集は、第一章がガウチンスキ詩抄、第二章ルジェーヴィチ詩抄、第三章現代ポーランド詩抄、第四章子どものための詩、第五章シヨパン

歌曲集の全五章から成り、十九世紀初頭から現代に至る三十人の詩人の詩百三十二編を集大成した、わが国で初のポーランド詩集です。

訳者の米川和夫氏は、一九八二年にまだ若くして亡くなられましたが、九年間に亘ってワルシャワ大学日文学科で教鞭をとられ、ポーランド文学者として著名な方で、本書はその遺稿です。訳文はポーランド詩のみずみずしさをみごとに生かした格調高いものです。

一読をおすすめします。

こねこのおひげ

「ミルクなんかね ぼく みもしない

から」
そんなおもしろいしずくが
ひとつぶ。

(5号89年2月)

ポーランド・日本協会だより

日本のみなさまへ

ポーランド・日本協会は一九八二年九月にウッジで登録されました。ウッジには日本の文化や日本に起源をもつスポーツに興味をもつ人たちがいて、この協会を設立することを提案したからです。一九八三年二月にもたれた組織化のための会議で、役員が選ばれました。そしてウッジ工科大学学長のジェルシー・クロー教授がポーランド・日本協会ウッジ支部の最初の支部長に選ばれました。約二百五十人の異なるサークルの人々がこの協会に参加しました。わたしたちの目的は、日本の文化、歴史、文学、演劇、スポーツ、経済、政治および科学についての情報を提供することです。わたしたちは考古学・民族学博物館に一室を得て、週に一度集まって協会に関する問題について議論します。通常月一回の講演または公演を行うことにしています。たとえば一九八七年にはクロー

教授の中国旅行についてのお話、盆栽、日本の現代映画、日本音楽、日本の日常生活に関する本の著者について集いが開かれました。

年に一度、わたしたちはいわゆる「日本文化週間」(注一)を企画実行しますが、これはウッジにおける大きな行事の一つです。今年茶の湯の師匠が開会式に招かれました。翌日は盆栽と生け花の発表会が行われました。そのあと、日本音楽、文楽、演劇、コンピューター、スポーツについての行事、ウッジ在住の日本人との話し合いなどが行われました。夜には日本映画が上映されました。また現代日本のグラフィック、着物、折り紙などの展示が行われました。一年を通じて、日本語、折り紙、および習字の研究会が行われています。参加者はわたしたちの六百冊におよぶ蔵書の中から本や辞書を借りることができます。それらの本の多

くは日本の基金から贈られたものです。

わたしたちはまた日本の大使館から非常な援助を受けています。ほとんどすべての行事の資金は、地方自治体から得ています。わたしたちの協会の会員はふつうは協会の仕事で報酬を得ることはありません。

わたしたちは講師として吉田勝一氏を採用していますが、彼の献身的な仕事ぶりは非常に感謝されています。

わたしたちの協会の人たちの多くは、日本の人々と親密になりたいと強く希望しています。そろそろポーランドと日本の人たちの直接の文通を開始したほうが良いと思います。

ポーランド・日本協会の活動

日本週間のプログラム

ポーランドのウッジ市では、元ウッジ工科大学学長のクロー教授と吉田勝一氏を中心とするポーランド・日本協会の活動が活発に行われています。その一例として、一九八五年に行われた日本週間のプログラムを紹介いたします。

できたら、文通したい人の名前、興味の範囲、年齢、文通のための言語などのリストを送りたいものです(注二)。

わたしたちはポーランド・日本協会の人たちが北海道札幌——日本で一番美しい島——の人々に対して抱いている非常に暖かい気持ちをお伝えしたいと思います。

(原文は英語、小笠原正明訳)

(注一) 次号にそのプログラムを掲載する予定です。

(注二) 「ポレ」4号にポーランドから送られてきたリストが掲載されています。

(6号89年4月)

共催・後援

ウッジ県文化協会連合

国立ウッジ考古学・民族博物館

在ポーランド日本大使館

◆十二月四日(水) オープニング

開会式

日本歌曲合唱紹介(ウッジ市民コーラス「エコー」)

記念講演「日本の宗教としての神

〈日本週間プログラム〉

道」W・コタニスキー教授（ワルシャワ大学日文学科）

日本紙幣展、和紙とおり紙展

おり紙教室、書道教室修了生修了証授与式

記念映画会「野麦峠」（日本大使館提供）

◆十二月五日（木）

講演「日本建築について」K・ストロベイク（ワルシャワ工科大学）

映画会「またぎ」（日本大使館提供）

◆十二月六日（金）

講演「日本文学について」A・ザレフスカ（ポ日協会ウツジ支部）

日本文学ポーランド語訳鑑賞会

ビデオ「地獄門」芥川龍之介原作

◆十二月七日（土）

日本武道実技紹介
剣道（ウツジ剣道クラブ）

合気道（シチエチン合気道クラブ）

柔道（ウツジ柔道クラブ）

弓道

ビデオ「空手」「忍者」

◆十二月八日（日）

公開おり紙講座

講演「文楽——日本の人形劇について」W・ポランスキー（ウツジ人形劇場）

（9号89年11月）

日本語教室生徒の作文

そろばんきょうしつに

はじめてかよって

ドロータ・ラスコフスカ

わたしはポーランドの小学校の八年生の女の子です。わたしの住むウツジという町は、ポーランドのまんなかあたりにあります。この町にはポーランド・日本きょうかいがあつて、わたしはこの日本語こうぎで日本語の勉強をしています。

毎年秋に日本文化週間があります。ことしは第六回目で「日本の学校一週間」というテーマで日本の学校のいろいろなじゅぎょうをたいけんしました。そのなかに「そろばん」のじゅぎょうが一週間毎日ありました。わたしは「そろばん」ってなんだろうと思ひながらさいしよのじゅぎょうに行きました。きょうしつにはこの「そろばん」のじゅぎょうのために、マルカリアンきみえ先生がロンドンからきていました。とてもやさしそうな目をした先生です。さいしよにそろばんのれきしとかつかいかたをせつめいしてくださいました。

二日目からはそろばんのじゅぎょうです。きょうしつにはたくさんの方がきて立つたままきく人もいました。わたしの国にも「リチドウォ」というそろばんみたいなものがあります。日本のそろばんとはとてもちがうことになりました。日本のそろばんはおやゆびとひとさしゆびをじょうずにつかつてかるくはじくだけでいろいろなけいさんができます。わたしもはやく先生のようにけいさんできたらいなと思ひながら毎日きょうしつに通いました。

一週間かよってかんたんなたしざん、ひきざんができるようになりました。きみえ先生はそろばんのもち方、すわり方などまでこまかく教えてくださったのでとてもわかりやすいじゅぎょうでしたのしかつたです。さいごのじゅぎょうで、先生はロンドンからもつてきたそろばんをわたしたちにとて安いねだんで売っ

てくださいだったので、わたしも買うことができました。そして次の日わたしたちはみんな自分のそろばんをつかつて、一〇級のしけんをうけました。しゅうりょうしきの時、しけんにごうかくした人も、ごうかくしなかつた人もひとりひとり先生からそろばんの絵はがきをいただきました。

わたしはそろばんきょうしつにかよつてとてもよかつたです。もつとたくさんそろばんのべんきょうしたいのですが、ポーランドにはそろばんの先生がいないのでできません。先生またポーランドにきて、そろばんのつづきを教えてください。どうもありがとうございます。

（14号91年5月）

ポーランドの物価

昨年末のポーランド週刊新聞「ポリティカ」に生活物価一覧が載っていましたので、その一部を円に換算、表示します。我国の物価と比較してみましよう。

パン・肉・果物・コーヒーなど食料品・嗜好品や映画、公営交通料金などは驚くほど安い。電化製品は札幌とそれほど違いがないようだ。

体制変革後、チェコ、ハンガリーとともに旧ソ連・東欧圏でトップを迫っていると言われているポーランド。昨年の所得水準は変革前の水準を越え始めたようだ。国民経済の低下と混雑が続く国が多い中で、ポーランドに於ける変革後の着実な成果を垣間見ることが出来る。

なお、新年からの一万分の一のデノミ実施、旧一〇、〇〇〇ズウォティが新一ズウォティとなり、グロシユ(百分の一ズウォティ)が復活した。

(富山信夫・30号95年5月)

ポーランドの物価

POLITIKA (1996.1.6) より

品物	市価 (1995)		月収で購入できる量		
	単位	円換算*	95	(参考) 94	86-88
パン	kg	60	536	497	524
牛乳	l	38	833	938	1,224
バター	250g	72	441	321	209
砂糖	kg	72	441	436	275
牛肉骨付	kg	319	100	102	109
豚ロース	kg	425	75	66	49
ソーセージ	kg	234	136	122	171
馬鈴薯	kg	26	1,250	1,017	1,004
リンゴ	kg	64	500	488	288
オレンジ	kg	106	300	265	47
コーヒー	100g	81	395	265	65
ウォッカ	0.5l	519	61	71	26
チョコレート	100g	60	536	432	106
婦人美容室	回	680	47	34	58
紳士背広	着	16,600	2	2	2
冷蔵庫 (28l)	台	56,500	1	1	1
カラーテレビ (21型)	台	41,200	1	1	0
映画	回	255	125	122	77
新聞	部	42-81	573	560	2,185
市営交通	回	17-34	1,407	1,525	2,532

*新1zl = 42.5円として (2.47zl = 1ドル = 105円)

ポーランド

クロニクル

(2) (12ページからつづく)

一九八八年

【三月】

三月八日

◆三月事件二十周年記念日、各地で行事が行なわれる。この前後に新聞雑誌に回想録などが発表される。

◆五十九人の知識人、反体制運動家、「連帯」活動家(ワレサを含む)がソ連の芸術家、学者にカティン事件について「公の」態度をとるようよびかける。

三月十日

◆国会で、無党派の議員R・ベンデルがカティン事件の解明を求める爆弾演説を行なう。「本院においてカティンという言葉が発せられなければならぬ。ポーランド国民の名誉が、先の戦争におけるその苦難の歴史がこれを求めている」。また、東独の一方的なポモージェ湾領海宣言について、西独が沈黙しているのは汎ゲルマン主義だと非難。

◆統一労働者党の議員で、ポーランドIIソ連歴史家混合委員会のポーランド側代表J・マテシェフスキは、ベンデルの発言に関連して混合委員会の作業の進捗状況を報告。

—新しいポーランドとの新しいお付き合い—

バブル景気のポーランド

吉野悦雄

エア・マックスというスニーカーをご存じですか？ 中高生の間で大人気の運動靴です。底に、透明な空気層の窓がいくつあるかでお値段が違います。その最高級品をワルシャワの靴屋で見ました。全面エアのタイプで五九九ズロチ、二万二千円。日本では見たこともありません。

イヴ・サン・ローランならご存じでしょう。その直営店がワルシャワの新世界通りに開店しました。日本ではデパートの中のコーナーにありますが、直営店はまだ知りません。もしかしたら銀座あたりにもうあるのでしょうか。

たまごっちの本物が昨年十二月上旬に売り出されました。四五ズロチ、千八百円。ワルシャワの小学生のほとんどが、模造品の子犬タイプやペンギン・タイプなどのたまごっちを持っていきます。二個持っている子供もかなりいます。

今年の一月初と二月の新車登録台数は八万台です。この数字は欧州ではドイツについて第二位で、フランス

やイギリスを抜いています。テレビやビデオへの需要は一巡して、今は冷蔵庫・洗濯機・ガスレンジなどの白物家電の西側輸入品に人気が集まっています。スウェーデン製のアルミサッシ窓枠やバス・タブなどで内装をリニューアルするのもはやりです。

勤労者の平均月収は千二百ズロチ、四万四千円。昨年の賃金上昇は二五%、物価上昇率は一七%、実質の賃金上昇は八%です。浮かれる気持ちには良く分かります。

失業率は全国平均で一%まで下落しました。ワルシャワの失業率は三・〇%。先月の日本の失業率は三・六%ですから、日本以上に人手不足です。

大変なバブル景気です。好景気で税収が増えたため、財政赤字は一挙に縮小しました。国外旅行も盛んです。先日、米軍戦闘機がイタリアでスキー・ゴンドラの綱を切つて多くスキー客が亡くなりましたが、その中にポーランド人の家族がいました。

た。

一九六〇年代までの日本人のポーランドへの接し方は、音楽や映画や社会のあり方を学ぼうとする謙虚な態度でした。ところが一九八〇年の連帯運動から援助とか支援という傾向が強くなりました。殿様気分の傲慢な態度でこれからのポーランドとお付き合いすると大きな摩擦が生じるでしょう。新しいポーランドとは新しいお付き合いの仕方を考えなければならぬでしょう。
(北大経済学部教授・
39号98年4月)

◆国会、地方選挙法改正案を可決。

投票の自由と秘密を保障、選挙民の選択権を拡大(一議席に三人までの立候補が可能、ただし競争は同一政党の候補者間でしか認められず、政党間の議席比率も事前の取り決めに基づく)。

三月二十一日

◆ヤルゼルスキ、統一農民党大会での演説で、第一・四半期以後もインフレ傾向が続くようであれば、政府に時限的に経済改革を実施するための非常全権を与える法律を上程すると述べる。

三月二十四日

◆同性愛者が団体登録を申請。規定の二カ月が経つても当局の回答なし。教会が反対?

【四月】

四月初め

◆ワルシャワでパン類が不足。メスネル首相が四月十一日に調査を命令する。消費組合と製パン組合に責任有りと結論。責任者に対して党の処罰を行なう。

四月十一日

◆政府、現在の中央銀行の各地方支店十を独立させる銀行制度改革案を提出。

四月十四日

◆作家S・I・ヴィトケヴィチの遺体が四十九年ぶりにウクライナの村ヴェルケ・エジヨロからザコパネの

母の墓地に移され、埋葬される。

四月二十六日

◆ノヴァ・フタのレーニン製鉄所で占拠スト。労働評価の五十%引き上げ。インフレ手当てを一万二千ズロチに引き上げ、勤続手当、損害手当、賃金インフレ連動制、四人の解雇事務員の職場復帰などを要求。カトリックの神父も駆けつける。スタロヴァ・ヴォラの軍需工場、ビドゴシチの市交通機関に波及。

◆政府、時限的にサドフスキ副首相(非党員)に経済運営の全権を委ねる。経済非常全権法を上程。

四月三十日

◆サドフスキ副首相、ワレサに会談呼びかけ。ワレサ拒否。

【五月】

五月一日

◆メーデー集会でヤルゼルスキ演説。「国民の疲労につけ込ませてはならない。われわれは反改革勢力、保守勢力の抵抗の前にも、冒険主義的、破壊主義的勢力の圧力の前にも屈しない」

◆反政府デモの参加者、一万二千人。ワレサ演説「ノヴァ・フタに連帯せよ、自分は諸君の先頭にたつて戦う」

五月二日

◆グダンスクのレーニン造船所で占拠スト。要求事項——①一万五千(二万ズロチ賃金引き上げ)、②「連帯」復活、③すべての政治犯の釈放、④

政治的理由で解雇された者の職場復帰、⑤スト委員会のメンバー、スト労働者の懲罰免除。参加者の大多数は二十代の若者。

◆夜に入ってワレサがレーニン造船所に駆けつける。しかし、ワレサは必ずしもストに賛成ではなかった。反体制派の知識人ミフニクはフランス誌に「『連帯』はゼネストを呼びかけない。ソ連で起こっていることはポーランドにも影響をもつことになるだろう。漸進的変化の可能性がある時には革命はやらないものだ」と語る。

五月三日

◆グレンプ首座大司教の説教。「経済は自らの法則をもっている。理性的な人々はソロモンみたいな人が空っぽの瓶から水をくみ出すのを待たないものだ」

五月四日

◆警察が四日から五日にかけての夜にノヴァ・フタのレーニン製鉄所のスト労働者を排除。抵抗なく、実力行動は十数分で終了。警察はグダンスクのレーニン造船所も包囲。

五月五日

◆元「連帯」顧問マゾヴェツキがレーニン造船所に駆けつけ、スト中止を説得。

◆ワルシャワ大学で占拠スト、正門に「ピウスツキ名称大学」の横断幕がかかる。ヴロツワフ大学、クラク

フのヤゲロニア大学でもスト。

五月六日

◆党政治局員ラコフスキによれば、今年の第一・四半期に価格上昇が四十五%にとどまったのに対して、金銭所得は六十%に達した。

五月十一日

◆夕刻、労働者が自発的に退去してレーニン造船所のスト終了。

五月十一日

◆国会、経済非常全権法を可決。

◆ソ連紙「文学新聞」が「歴史の空白」についてのソ連とポーランドの歴史家の円卓会議議事録を発表。

五月二十八日

◆モスクワ放送がカティンの犠牲者はナチスドイツではなくソ連の行為者の弾丸で殺されたと報道。ウルバン報道官によれば、カティンは最近ポーランドからの訪問者、とくにカティンで殺された将校の家族に開放された。

五月三十日

◆政府、国有、組合有、私有の別なくすべての企業の自由と平等を保障する経済業務法(「経済の憲法」)を上程。

【六月】

六月十二日(十三日)

◆党中総、バリワラ保守派書記局員を更迭、ラコフスキ、バカ、オジェホフスキら改革派を書記局に選出。
六月十九日

◆新しい選挙法に基づいて地方選挙が実施される。試行的に約一千の選挙区で異なった政党間の競争が許され、約七百の選挙区で反対派の立候補が許された。五日前の世論調査によれば少なくとも六十(六十三%)の投票率が見込めるはずであったが、県レヴェルで五五・〇%にとどまった。郡部ではやや高かったが、都市部では極端に低かった。ワルシャワの四九・二%は高い方で、シチエチンでは三七・五%、ポズナ

ンでは三五・四%、グダンスクでは二七・五%であった。政府スポークスマンは、値上げなど経済情勢の影響を指摘、次回の国会選挙の際には一層の選挙法改正があるだろうと予告。

六月二十二日

◆ソ連紙「文学新聞」がソ連を訪問したグレンプ首座大司教のインタビューを掲載。グレンプはカトリック教会がいつも国民とともに歩んできたこと、カティン事件の解明が両国関係改善のために不可欠なことなどを強調。

六月二十四日

◆ヴロツワフで開かれたポーランド東独青年友好祭に東独議長ホネカーが来訪、両国首脳会談が開かれたが、ポモージェ湾の領海紛争については決着がつかなかった。

【七月】

七月一日

◆政府機関紙、カティンで殺された旧軍将校の八十三才になる未亡人が現地訪問を許された模様を報道。

七月十一日～十六日

◆ソ連共産党書記長ゴルバチョフのポーランド訪問。各地で大歓迎を受ける。ヤルゼルスキが歓迎の挨拶で「この国で率直な共感と本物の人気を得るのは容易ではない。あなたはそれに成功した」と述べる。「連帯」運動発祥地の一つ、シチエチンを訪れたゴルバチョフは「われわれはペレストロイカをやっている今、諸君の経験に多くの有益なことがあることに気がついた」と語る。ポーランド知識人との対話集会に出席し、ブレジネフ・ドクトリンの否定などを求める声に耳を傾ける。

(3)

一九八九年

【五月】

五月十日

◆立候補を締め切る。上院一〇〇議席に対して共産党一八六、統一農民党九〇、民主党六九、カトリック各派一九、反対派一二二（うち「連帯」市民委員会一〇〇）の候補者をそれぞれ立てた。

五月十一日

◆党機関紙「トリブナ・ルドウ」、スターリン時代の党指導者をきびしく

批判する党中総決議を発表。ビエルト大統領時代には不当逮捕、拷問、でっち上げ裁判など多くの犯罪があり、公安当局による迫害が行なわれたと認める。

五月中旬

◆世論調査センターの発表によれば、投票について回答者のうち四八%がする、三四%がおそらくする、九%がおそらくしない、八%が絶対しないと答える。

〈中略〉

五月三十日

◆政府報道官は投票率について樂觀的な見通しを語る。最新の世論調査によれば、投票について回答者の五二%がする、三〇%がおそらくする、七%が絶対しないと答える。また政党支持について五一%が「投票するが、どの政党に投ずるかは決めていない」、七%が「《連帯》の推薦のない候補はすべてリストから消す」、一・四%が「《連帯》と関係のある候補者はすべてリストから消す」と答える。

五月三十一日

◆この日締め切った「ポリティカ」誌のアンケート調査によれば、選挙の投票率は七六・五%、上院一〇〇議席のうち政府連合側が三二、野党「連帯」側が五五、その他の無党派が一三を、下院の無党派に割り当てられた一六一議席（三五%）のうち野

党「連帯」側が一二〇、他の無党派が四一をそれぞれ獲得すると予想された。

【六月】

六月二日

◆ヤルゼルスキ国家評議会議長は突然テレビ演説を行ない、選挙後の大連立の可能性を示唆する。

◆「週間連帯(Tygodnik Solidarnosc)」復刊第一号出る。

六月四日

◆総選挙第一回投票日。投票率は予想外に低く、六二・一一%。ウッチ市がもっとも低く五五%弱、レシノ、ジェシュフ市などが高く七〇%強。

六月八日

◆選管発表によれば、第一回投票で、野党「連帯」側が無党派に割り当てられた下院一六一議席のうち一六〇を、また上院一〇〇議席のうち九二を獲得。これに対して政府連合側は大多数の候補者が投票数の五〇%というハードルを越えられず、わずかに五人の当選者を出したにとどまり、上院では全員落選した。しかし、もっとも衝撃的だったのは指定席の候補者三五人のうち三三人（いずれも政府と党の最重要指導者）までが五〇%のハードルを越えられず、落選してしまつたことである。

六月九日～十一日

◆ヤルゼルスキ議長がベルギー、イギリスを訪問。

六月十三日

◆ラコフスキ首相、キンチャク内相ら落選した三三人は議席を断念すると発表。ラコフスキは心臓病で入院したと伝えられる。

六月十四日～十六日

◆ミッテラン仏大統領がポーランドを訪問、経済協力を約束。

六月十八日

◆総選挙第二回投票日

六月十九日

◆選管発表によれば、下院で「連帯」市民委員会が取り残した一議席を獲得、また上院でも残りの八議席のうち七議席を獲得。上院の残りの一議席は独立派が獲得して、政府与党側は文字どおり全滅した。政府与党側の枠では、多くの大物が自派の無名候補相手に苦戦し、政治局員のうち当選したのは二人、また閣僚のうちやはり二人という惨憺たる結果に終わった。一般的には、改革派が進出し、公認労組(OPZZ)関係者が落選したのが目だった。

六月二十一日

◆オジェホフスキ党政治局員が統一労働者党(共産党)を解散し、新しい党を発足させる可能性を示唆する。(作成・伊東孝之)

4号88年8月、7号89年7月)